

当院における胆嚢・総胆管結石症に対する腹腔鏡下総胆管切開切石術の治療成績とその有用性

まつ ばら たけし いし ばし しゅう いち
松 原 毅 石 橋 脩 一
た ばら ひで き
田 原 英 樹

キーワード：総胆管結石，腹腔鏡下手術，高齢者

要 旨

胆管結石症に対する治療法として一期的な腹腔鏡下手術は定着していない。当院では、内視鏡治療に伴う乳頭機能の障害による胆管炎や胆管結石の再発を懸念し2007年4月から一期的腹腔鏡下手術である腹腔鏡下総胆管切石術を導入してきた。今回腹腔鏡下総胆管切石術を施行した44例について高齢者に関する考察を加えて検討した。

胆管切開に起因する術後合併症（胆汁漏）は5例に認め Clavien-Dindo 分類 Grade IIIa 合併症を1例（2.3%），Grade IIIb を2例（4.5%）に認め，術前総胆管径が細い症例は有意に Grade II 以上の胆汁漏の発生割合が高かった。胆管結石再発は2例（4.5%）であった。85歳以上の高齢者群と85歳未満の非高齢者群において術後合併症，結石再発に関して両群間に有意な差は認められなかった。鏡視下縫合技術の向上などにより腹腔鏡下総胆管切石術はその臨床成績から妥当であると考えられた。

はじめに

わが国では，胆管結石症に対する治療法としては内視鏡的乳頭切開術（endoscopic sphincterotomy: 以下 EST）や内視鏡的乳頭拡張術（endoscopic papillary balloon dilatation: 以下 EPBD）などの内視鏡的治療が主として選択され

てきた。特に，腹腔鏡下胆嚢摘出術（Laparoscopic cholecystectomy: 以下 LC）導入後は，EST などの内視鏡治療の組み合わせが標準的治療として行われており総胆管結石症に対する一期的な腹腔鏡下手術（腹腔鏡下総胆管結石切石術（Laparoscopic common bile duct exploration: 以下 LCBDE））は必ずしも定着しておらず内視鏡外科学会アンケートでは全例に施行する施設は2013年で5%程度と報告されている¹⁻³⁾。EST や EPBD では少なからず乳頭機能の障害による胆

Takeshi MATSUBARA et al.

出雲徳洲会病院外科

連絡先：〒699-0631 出雲市斐川町直江3964-1

出雲徳洲会病院外科